

兵庫県南部地震で

共に悲しみ援助考えるため仏教徒の参加求む

読者のひろば

真言宗豊山派石手寺副住職 加藤 俊生

臨済宗妙心寺派安国寺住職 浅野 泰巖

一月十七日に阪神地区を大震災が襲い、五千人を超える人々が亡くなり、三十万の避難民が生まれ、関東大震災以来の災害となりました。今被災者は亡き人を悲しむ中で、自分たちのこれからの生活に不安を抱き、不便な生活を送っています。マスコミはこれを詳しく伝え、それを知った人々は救援に動き、物資と資金を送り、そして直接現地でボランティア活動に参加しています。

多くの方々が救援に動いていますが、この中に僧侶の姿が見えません。僧侶はこのような時、何をしたらよいのでしょうか。道場の者は道場におり寺の住職は寺にいて動けないのかもしれませんが。しかし、この被災地の現実を見れば、日常の修行等を中断してでも救援に手を差し出し、何かしなければならぬと思います。

私たちは地震で五千人の方が亡くなったと聞きました。それならばまず初めにすることは、この方々の苦しみを思い、慰霊することであろうと思います。慰霊の方法としていろいろな形が考えられます。その一つとして、法衣を着て被災地に行き、徒歩読経することがあると思います。宗派を超えた者が共に集まって読経し、傷ついた人々の心に励ましの声をかけ、次に何ができるか、その動きの中で見つけたいと思います。

私たちが、今なぜ慰霊行動をしたいのかというと、苦悩する被災者救援について、高邁な仏教理論でなく、直接体に触れ目に見える行動を起こさないと、それは慈悲にも救いにもならないのではないかと思うからです。仏教には独りで修行を完成していくやり方もありますが、一方ジャータカ物語（前世話）では捨身飼虎など、他者に対する行為も大切だと説かれています。それならばこの地震被害者を前にしても、何事が行動を起こさなければなりません。

仏教の慈悲は、この大災害を前にしてどのように現われるのでしょうか。救いの説教はどう生かされるのでしょうか。日本に仏教があり、私たちが仏教徒だというなら、ここにその形を示さねばなりません。

私たちは仏教を文化と見るのではなく、僧侶をエリート扱いするのではなく、この二つを救いの原点として我々の手に取りもどすため、人が亡くなり物が壊れた所に立ち、行動したいと思います。皆様には趣旨をご理解いただきご賛同お願い致します。

案

一、僧衣にて被災地に行き徒歩読経する。特に死亡された所においては供養する。三日間、都合のつかぬ者は一日、もしくは時間参加可。

一、日時、集合場所については後日決定。予定二月中。

一、唱える経、各自宗派の経。

一、参加費特になし。線香持参。

一、予定行動後、現地ボランティア参加（事前に決定）、もしくは独自救援。寝袋持参。

私たちは、神戸、北淡町近くに知人がいません。当地にてお世話できる方、集合場所、宿泊地をご紹介下さる方がいましたら、ありがたいとおもいます。

ご意見をお寄せ下さい。